

【 復活讃詞 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
天 在 者 樂 地 在 者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
悦 主 其 臂 力 顯

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復
死 以 死 滅 ぼ し 復

くかつのはじめとなり、われらをぢごく
活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくい、せかいにおおいな
腹 救 世 界 大

るあわれみをたまいたればなり。
憐 賜

【 日本の亜使徒聖ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
何 時 世 世

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ
 照 お 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
 全 世 界 の 爲 に 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
 三 者 祈 給

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより 聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより 讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と
 なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行う者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
 を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、我が神に歌い歌えよ、我が王に歌い歌えよ、

わがかみにうたいうたえよ、わがお王
 我 神 歌 歌 我 王
 うにうたいうたえよ。
 歌 歌

誦經) 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、

わがかみにうたいうたえよ、わがお王
 我 神 歌 歌 我 王
 うにうたいうたえよ。
 歌 歌

誦經) 我が神に歌い歌えよ、



【 使徒經 (アポストロス) 93 端 ロマ書 6 章 18~23 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが ^{じん たつ} ロマ人に ^{しょ よみ} 達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{なんぢら} 爾等 ^{つみ} は罪より ^と 釋かれて、^{ぎ ぼく な} 義の僕と爲れり。^{なんぢら} 爾等 ^{にくたい} が肉體の ^{よわ} 弱きに ^よ 因りて、^{われ} 我

^{ひと} 人の ^{じょう} 情に ^{したが} 循いて ^い 言う、^{なんぢら} 爾等 ^{かつ} が曾て ^{そのしたい} 其肢體 ^{ふけつふほう} を不潔不法 ^{ぼく な} の僕と爲して、^{ふほう} 不法に ^{ゆだ} 委ねし

^{ごと} ごと ^か 如く、^{いまなんぢら} 斯く ^{したい} 今 ^{ぎ ぼく な} 爾等の肢體 ^{せいせい} を義の僕と爲して、^{ゆだ} 成聖に ^{けだしなんぢら} 委ねよ。^{つみ} 蓋 ^{ぼく} 爾等 ^{とき} 罪の僕たりし時

^ぎ は、義より ^と 釋かれし ^{もの} 者たり。^{そのときなんぢら} 其時 ^{なん} 爾等に ^{けつかあ} 何の結果 ^{いまみづか} 有りしか、^は 今 ^{ところ} 自ら ^{しわざ} 耻づる所の行爲 ^な な

^{けだしそのおわり} り、^し 蓋 ^{しか} 其終 ^{いまなんぢら} は死なり。^と 然れども ^{かみ} 今 ^{ぼく な} 爾等 ^{とき} 罪より ^{なんぢ} 釋かれて、^{なんぢ} 神の僕と爲りし時は、^{なんぢ} 爾

^ら 等の結果 ^{けつか} は成聖 ^{せいせい} なり、^{そのおわり} 其終 ^{えいえん} は永遠 ^{いのち} の生命 ^{けだしつみ} なり。^{むくい} 蓋 ^し 罪の報 ^{かみ} は死 ^{たまもの} なり、^は 神の賜 ^は はハ

^{われら} リストス・イイス ^{しゅ} 我等の ^よ 主に ^{えいえん} 由る ^{いのち} 永遠の生命 ^{なり} なり。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。あなたがたは罪から解放され、義の僕となった。わたしは人間的な言い方をするが、それは、あなたがたの肉の弱さのゆえである。あなたがたは、かつて自分の肢體を汚れと不法との僕としてささげて不法に陥ったように、今や自分の肢體を義の僕としてささげて、きよくならねばならない。あなたがたが罪の僕であった時は、義とは縁のない者であった。その時あなたがたは、どんな実を結んだのか。それは、今では恥とするようなものであった。それらのものの終極は、死である。しかし今や、あなたがたは罪から解放されて神に仕え、きよきに至る実を結んでいる。その終極は永遠のいのちである。罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、ア ril l i ya、

【 ア ril l i ya 主日第3調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ われなんぢ たの ねが われよよ はぢ え} 主よ、我爾を恃む、願わくは我世に羞を得ざらん、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{わ ため けんご かくれが われ つね かく え たま} 我が爲に堅固なる避所となりて、我に常に隠るるを得しめ給え、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 25 端 8 章 5～13 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス、カペルナウムに入りし時、百夫長彼に就きて、求

めて曰えり、主よ、私の僕癱瘋にて家に臥し、苦むこと甚し。イイス彼に謂う、

我往きて之を醫さん。百夫長對えて曰えり、主よ、爾が私の舎に入るは、我當ら

ず、唯一言を出せ、然らば我が僕愈えん、蓋我人の權に屬すれども、我が下に兵卒

ありて、我此に往けと云えば往き、彼に來れと云えば來り、我が僕に是を行えと云えば

行ふ。イイス之を聞きて奇と爲し、従う者に謂えり、我誠に爾等に語ぐ、イスラ

リの中にも、我是くの如き信を見ざりき。我又爾等に語ぐ、衆くの者東より西より來

りて、アブラム、イサク、イアコフと偕に天國に席坐し、而して國の諸子は外の幽暗

に逐われん、彼處には哀哭と切齒とあらん。イイス又百夫長に謂えり、往け、爾の信ぜ

し如く爾に爲るべし、斯の時其僕愈えたり。

(比較用 口語訳) イエスがカペナウムに帰ってこられたとき、ある百卒長がみもとにきて訴えて言った、「主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています」。イエスは彼に、「わたしが行ってなおしてあげよう」と言われた。そこで百卒長は答えて言った、「主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいて、ひとりの者に『行け』と言えば行き、ほかの者に『こい』と言えばきますし、また、僕に『これをせよ』と言えば、してくれるのです」。イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、「よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、この国の子らは外のやみに追い出

され、そこで泣き叫んだり、齒がみをしたりするであろう」。それからイエスは百卒長に「行け、あなたの信じたとおりになるように」と言われた。すると、ちょうどその時に、僕はいやされた。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮

はなんぢにきす。
は 爾 なんぢに き 歸 す。

※聖体礼儀③（金口イオアン聖体礼儀）へ